



Title	幕末期加賀藩の政治と海防〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	倉田, 守
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16484号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94901
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Mamoru_Kurata_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：倉 田 守

	主査	教授	谷 本 晃 久
審査委員	副査	教授	川 口 暁 弘
	副査	准教授	落 合 研 一

学位論文題名

幕末期加賀藩の政治と海防

【当該研究領域における本論文の研究成果】

本論文は、日本近世史、とりわけ加賀藩を対象とした藩政史・幕藩関係史ならびに幕末維新史の研究領域に属する論考であると位置付けることができる。その成果は、大きく分けて以下の3点にあるものと認められる。

①日本近世の幕藩制国家を構成する最大の藩である加賀藩政の構造的特質につき、『加賀藩史料』や加越能文庫所載・所収の膨大な史料を縦横に活用することにより、一次史料に徹底して立脚した重厚な叙述をなすことに成功している。藩政史分析としては、若林喜三郎、ロバート・フラーシェム、蔵並省自をはじめとした加賀藩研究の蓄積を批判的に継承しており、加賀藩（加越能）研究の潮流と本格的に切り結んだ成果となっている。こうした研究潮流の近年における優れた成果として宮下和幸『加賀藩の明治維新：新しい藩研究の視座 政治意思決定と「藩公儀」』（有志舎、2019年）があるが、本論文の基となった諸論考に基づいてこそ深められた立論もあり、本論文で叙述された研究が当該研究分野において既に定評のある成果となっていることを示している。本論文では新たに、加賀藩海防方の新設年代（嘉永7年4月）を確定したうえで、それ以降に複雑に推移した海防政策をめぐる政治過程における藩主ならびに年寄・家老（いずれも数千石～1万石以上の石高を持つ）といった上層部藩臣間の角逐を丹念に分析することで、藩主を軸とした藩の政治意思決定構造を明確に示した。また、海防方の下に設けられた壮猶館運営の実態など、こうした分析を支える当該テーマに関する多彩な個別実証は、今後の加賀藩政史研究が参照すべき事例の数々を豊富に提示した成

果と評価される。

②加賀藩の実施した海防施策の実態に関して、砲台場の築造・反射炉の導入・農兵取立などにつき具体的に明らかにした点は、高く評価できる。従来加賀藩におけるこうした施策については、史料の実証に基づいた全体像の提示が必ずしもなされてきておらず、ひとつの論文のなかで総合的かつ精緻に叙述された点は、比較史の観点からも貴重な成果である。とりわけ、技術史の板垣英治らによる評価を再検討し、文久期に加賀藩で反射炉の試験運用が実施されたこと（銑鉄の溶解には失敗）を実証した点は、同時代の日本における溶解炉技術導入の実態を幕府・他藩の事例と比較するうえで貴重なデータを提供した。また、農兵（銃卒）取立に際し、藩主が士分取立（武装供与）策に対し「一揆国」であることを理由に難色を示した領民への不信感の指摘は、豊臣大名出自の前田氏による近世加越能支配の前提を図らずも示した事例として興味深い議論を提供するとともに、農兵取立を推進した幕府・他藩の事例・論理と比較する視座を示す成果となった。

③いわゆる「梅鉢海軍」などと称されてきた加賀藩による海軍創出の過程と実態を、個別具体的な史料の分析に基づき、可能な限り復元して叙述した点は、貴重な成果となった。従来加賀藩海軍の研究は、主に発機丸という艦船の航海日誌に基づいてなされてきたが、本論文ではそれに止まらず、その全体像を描くことに成功している。幕末維新史研究の岸本覚は、前掲宮下書への書評のなかで、加賀藩海軍の創設・運用の評価に触れ、将軍上洛や幕府・加賀藩の政治改革・軍制改革と連動した立体的な分析の必要性を提起しているが（『日本史研究』696、2020年）、本論文はそれに応えるべき素材を重厚に叙述した結果となっている。ここで示されたファクトの数々は、幕末維新时期の日本に創出された幕府・諸藩による海軍の評価分析に、加賀藩の事例を豊かに加える結果を齎している。このことは、慶応期にイギリス・アメリカの測量船が加賀藩領に来航した際の対応の分析とも呼応し、つまり、開国・開港期の幕藩制国家それ自身が示した軍事・外交の実際を、近世最大藩であり、当時藩主正室（慶応2年以降は藩主実母）を将軍家から迎えていた加賀藩の視点からアプローチする途を実証的に開く成果として評価できる。

本論文は総じて、稠密な個別具体的実証に基づいた叙述に支えられており、19世紀以降の加賀藩政史研究に重厚さを加えつつ新たな論点を切り開いた点は、高く評価されてしかるべきである。一方、審査の過程で委員からは、優れた個別実証の成果の全体史的評価の論述がいまだしである点、また同時代の幕府や諸藩、とりわけ西南雄藩の実践した海防を軸とした軍事・藩政改革との比較の視座に乏しい点などが、課題として指摘された。これらは、本論文が重厚で豊かな歴史叙述に成功しているがための課題であり、口頭試問ではこうした論点につき、申請者から今後の研究展望が説得的に示された。

【学位授与に関する委員会の所見】

以上の審査の結果、審査委員は全員一致して、本論文の著者である倉田守氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。